記念品

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

記念品

【Ｎコード】

Ｎ３８４１ＣＡ

【作者名】

ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】

アラブの王族と密通して、宗教警察に捕らえられたイギリス人女性が不義をした相手の妻から受ける残酷な復讐。

プロローグ

唐突に目覚めたジェシカはベッドの上で身じろぎした。それから、サイドテーブルにあるデジタル時計に視線を向ける——緑色のラインの輝きは、今が午前四時一〇分であることを静かに示していた。
ベッドの中で胎児のような姿勢を取ったジェシカは、思春期になって以来、ずっとしてきたやり方で自身を慰めるべく、右手を太腿の間へと忍ばせる。しかし、いかなる心地よさも到来しなかった——そう、二度と決して、彼女は性的な快感を得ることが叶わないのだ。
ジェシカは仰向けになると、暗がりの天井を見つめながら、アラビアでの悪夢のような体験に思いを馳せた。その一連の出来事は僅か一日のことにすぎなかったが、くっきりと心の奥深くへと刻み込まれていた。
半年ほど前に、ジェシカの性的な快楽の源泉は、砂漠の小さな街で永遠に失われてしまったのだ——。

プロローグ（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は今は亡き　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループに投稿された　Ｔｏｄｄ　氏による、„Ｓｏｕｖｅｎｉｒ„です。タイトルの『記念品』は原作タイトルをそのままです。本作は多くのアダルトＳＮＳの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループに（Ｔｏｄｄ　氏以外によって）何度も繰り返し投稿され続けられている名作中の名作です。

残念なことに、Ｔｏｄｄ　氏は十年ほど前までは　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説をいろいろと書いていたのですが、最近はまったく書いていません。じつは訳者は　Ｔｏｄｄ　氏と個人的な親交があり、新作をお願いしたところ、「逮捕される可能性があるから書けない」とのこと。Ｔｏｄｄ　氏の住む国が、どこであるかは敢えて記しませんが、書きたいことが自由に書けないというのは非常に悲しいことです。

なお、原作では、話の舞台になる国や地名は実在のものですが、この翻訳では国名はぼかして、地名は読みを微妙に変更してあります。政権の中枢や行政機関の長がすべて王家の人間によって占められている、アラビア半島にある男尊女卑の王国です。

捕らわれたジェシカ

ジェシカ・ローソンはイギリスにおける学校教育の現場で大きな不満を抱き、ストレスを溜めこんで退職した教師だった。彼女は貯蓄の許す限りはパートタイムで働いていたが、それが尽きる頃に人材バンクからアラビア半島にある王国での年契約の仕事を斡旋された。

仕事の内容はリャダに住む王族の子女に英語を教える家庭教師だった。一年間にわたって破格の高給を得られるチャンスに、ジェシカは一も二も無く飛びついた。そして、教え子となった八歳と九歳の姉妹は、申し分なく優秀な生徒だった。手を焼いたロンドンっ子たちとは大違いで、とても自発的に学習に取り組む少女たちだったのだ。

そういったわけで、ジェシカの仕事は順風満帆だったが、彼女は二十八歳の若い女性でもあった。異国の地で独りわびしく過ごす生活に寂しさを感じるようになり、その心の隙間を埋める何かを自然と求めるようになっていた。じつは、それこそが誤った人生へと踏み出す第一歩だったのだが……。

いつしか、ジェシカは少女たちの父親――モハメッドを意識し始めていた。彼は三十代半ばのハンサムな男性で、とても魅力的だった。そのウイットに富んだ話術は若い女性を魅了するに十分なものだった。そして、彼は英国人女性に対して、自分を『モー』と渾名で呼ぶように求めた。

短い月日の間に、二人の関係は親しげな雑談から冗談を言い合うような間柄へと進展し、ついには猥談を交わすような仲となっていた。そして、モハメッドは英国人女性を口説き、ジェシカは王族の男性に抱かれた。

この国の人々にとって、不義密通が重罪であるということに気づ

いたジェシカは、深入りしないようにと心がけたが、モハメッドの求めに応じていくうちに、二人の逢瀬は日増しに短い間隔で行われるようになっていった。
ジェシカとモハメッドの情事は、いつも市内のホテルで為されていた。彼らの人目を忍ぶ関係は誰にも悟られてはならなかったので、二人はとても慎重だった——少なくとも、英国人女性はそう信じていた。
しかし、リャダはロンドンとは違って、他人の行動に対し、まったく無関心な人々が住む都市ではなかった。すぐに二人の関係は誰もが知るようになった。金髪をした英国人女性が常に同じ部屋を予約するホテルへ、それと同じ時間帯に、王族のモハメッドがいつも訪れていたことが疑惑を招いたのだ。
人々は内緒話を交わし合った——女遊びに慣れた王族が白人女性とうまいことやっていると、多くの男性たちは羨ましがった。だが、一部の信心深い人々は神とイスラム教に対する犯罪であり、恥知らずな振る舞いであると主張した。どちらかと言えば、後者の方が世間に与える影響力は大きかった。
最終的には、モハメッドとジェシカの情事に対して、善後策が講じられることとなった。まず最初に、彼の正妻であるファティマに事実が告げられた。当然のことながら、『男に捨てられた女の怨念は地獄よりも恐ろしい』との格言どおり、彼女は夫の不義に対して激怒した。さらに夫を寝取った英国人女性に対する憤りは尋常なものではなかった。
この世に、女性の嫉妬以上に厄介なものはなく、また、妻の復讐以上に残酷なものは存在しなかったのだ……。
破滅の時は、四月のある晩に訪れた。
筋骨逞しい警官の激しい体当たりで、ホテルのスイートルームの扉が打ち砕かれたとき、恋人たちは熱情的な逢瀬に耽溺しきっていた。そして、警官たちは脇目も振らずにスイートルームの寝室へと

なだれこんでいく。
　ジェシカは乱暴な侵入者たちに恐怖して悲鳴をあげた。しかし、何が起きたかを即座に理解したモハメッドは諦観して、がっくりと肩を落とした。宗教警察による強制捜査だった。つまり、彼は密通を犯している現場を押さえられたのだ。
　部屋に侵入してきた男たちの様子を窺ったモハメッドは、彼らの視線から暗黙の了解を読み取ると、裸のままベッドから飛びだし、そのままバスルームへと逃げ込んだ。警官たちは、その行為をあえて見逃した。彼らには王族を捕らえる権限がなかったからだ。だが、白人女性に対しては異なっていた。
　ジェシカが自身の裸を絹のシーツで覆ったとき、男たちはベッドを取り囲むと、威嚇するように怒鳴り声をあげて、唾を吐きかけてきた。その仕打ちに、彼女が耐え忍んでいると、白い髭を生やした年嵩の男が部屋に入ってきて、警官たちに大声で何事かを命じた。
　薄地のシーツだけしか身にまとわせてもらえなかったジェシカは、清掃員用の通路と階段を通ってホテルの裏口まで乱暴に引き立てられた。それから、ホテル脇の道路に駐車していた幌付きジープトラックの中へ押し込まれた。
　黒い塗装のボディを砂埃によって白っぽく見せているジープトラックは、英国人女性を乗せると、車体を横滑りさせながら急発進した。
　ガクガクと激しく揺れる車が整備不良のエンジン音を響かせながら暗い夜道を走り抜け、煌々と明かりが灯る都市部から真っ暗闇の砂漠へと入ったので、ジェシカは恐怖と車酔いから、状況を正確に考えることがまったくできなくなった。
　ずっと続くのではないかと思えた不快なジープトラックでの長旅も、ジェシカが不整地走行に慣れ、その車酔いが治まりかけた頃に終わりを迎えた。星明りだけの薄闇の中、車は砂に埋もれるよう立地する小さな街の中へ入ると、比較的大きな建物の前で止まった。
　ジェシカは車外へ引きずり出されたとき、自身の体をまだ覆って

いるシーツをしっかりと掴み直した。そして、彼女と護送の男たちは植民地時代の古びた廃墟のように見える薄汚れた建物の入り口へと足を向けた。中へ入ると、実際、そこは古い時代に建てられた軍事要塞のようだった。

いつの間にか、ジェシカは消毒薬の微かな匂いが漂う、壁を白いタイルで覆われた医療施設のような場所に来ていた。そこに一つだけあるドアが開かれると、部屋の中にはあぶみを備えた木製の婦人科診察台を中心に、数多の医療設備が所狭しと配置されていた。そして、その診察台の傍には白衣を着た男性と黒いベールをまとった女性が佇んでいた。

ジェシカは、警官たちが立ち去る前に自分を婦人科診察台に拘束したので、この後、性器を検査されるのだということを悟った。そして、思ったとおり、アラブ人の女性が診察台へ近寄ると、これまでずっと彼女の裸を隠し続けていたシーツを奪い取り、両足をあぶみへと置いた。そのあぶみが左右に動かされると、股間は無防備に晒けだされる。

それから、白衣を着た男性――おそらくは医師が手袋を着けて、診察台の前のスツールに腰掛けると、剥き出しになっている性器を検診し始めたので、ジェシカは激しい羞恥心から顔を真っ赤に染めた。医師は膣内を慎重に触診してから、まだ、その中に残っている体液を採取した。英国人女性が少し前に性交した相手を特定するための証拠となるものだった。

さらに、ジェシカにとって不本意なことに、彼女の性器を検診する医師は、隣に佇むアラブ人の女性からも詳細に観察できるよう十分に配慮していた。なぜか、二人とも白人女性の陰核に対して格段の興味があるようだった。

医師は陰核包皮を完全に捲り返すと、剥き出しになった薄桃色の陰核亀頭へ指先を無造作にあてがう。ジェシカが息を切らすようにして喘ぎを漏らすと、二人は頷き合って笑みを浮かべる。すぐに、医師は捲り返していた包皮を戻すと、陰核全体をぐるぐると転がす

ように刺激しながら、その変化を熱心に観察する。
しばらくすると、このような状況にもかかわらず、ジェシカの陰核は見ている者が恥ずかしくなるほど大きく膨らんで、あからさまに屹立し始める。その様子を見たアラブ人女性は嫌悪感を顕わにしつつ、吐き捨てるようにして何事かを呟いた。
この後、ジェシカは婦人科診察台での束縛から解かれ、立ち上がることを許された。身を纏う布地として、頭からすっぽりと被る長衣も与えられた。それから、照明がほとんどない薄暗い廊下を歩かされて、ベッド以外に何もない独房へと閉じこめられた。
堅いマットレスだけのベットに横たわるジェシカの心の中で恐怖と不安が激しく渦巻いていた。この国で密通が重罪であるということを彼女はよく理解していた。そのとき、自分に与えられるかもしれない処罰の数限りない可能性が疲れ切った頭の中をぐるぐると巡り続けていた。
ジェシカはまんじりともせず、狭苦しい独房の中で短い夜を過ごしたのだった……。

中東での夜明けは六時三〇分だった。
朝食はパンと水だけしか与えられなかったが、十時頃、ジェシカは独房から連れ出され、砂漠においては贅沢なシャワーを浴びることを許された。その後、いずれ降りかかってくる運命を待つために元の独房へと連れ戻された。
春のアラビア半島の気温は、日中になると、それなりに高くなる。風通しの悪い小さな独房に閉じ込められているジェシカにとっては、しだいに辛い暑さになりつつあった。今や、彼女は理由を告げられずに放置され続けられている不安よりも不快な暑さと退屈とで、うんざりし始めていた。
このひどく汚い場所で半日近い待機が、いい加減、ジェシカにとって耐えられないものになってきたとき、突然、ドアの外で通路に沿って足音が反響した。それは独房の方へ近づいてくると、ドアの

前でぴたりと止まった。それから、鍵が解除される音がしたかと思うと、使い古された蝶番が軋みを立てながらドアが開いた。
独房の入り口に立っていたのは、ジェシカをここまで連行してきた警官のうちの一人だった。彼は部屋に入るなり、英国人女性に冷徹な視線を投げかけたが、何も言わなかった。
「私をどうするつもりなの？」
沈黙に耐えきれず、ジェシカは口を開いた。
「今すぐ、釈放してちょうだい」
「ローソンさん、おめぇさんはとんでもねぇ罪を犯しただ」
口を閉ざしていた男は、アラブ訛りの英語でゆっくりと答えた。
「このまんま、俺についてくるだ」
「どういうこと？　いったい、どこへ連れていくつもりなの？」
ジェシカは慌てて尋ねる。
「おらについてくれれば、わかるだ」
警官は投げ遣りに答えた。
「ともかく、一緒に来るだ！　そしたら、すぐにわかるだ」
どうやら、ここに到着したときに連れていかれた医療施設へ向かっているようだった。
「どうして、また、診察室へ連れていくの？」
言いようのない不安に駆られたジェシカは、今一度、同じ言葉を口にした。しかし、同行者は質問を無視して、より足を早めただけだった。彼女の心臓は今にも飛び出しそうだった。そして、早鐘のように胸を打ち始めていた。
医療施設への入り口まで来ると、警官は扉の鍵穴にキーを差し込んで力いっぱい回した。それから、開錠したドアを開くと、怯えて足を止めたジェシカに、中へ入るように促した。彼女は不本意ながらも、男の指示に従って、その後ろに続いた。
診察室の前の廊下にはベールを被った女性たちが何人か集っていた。ジェシカは、そのうちの一人がひときわ豪華な衣装と装飾を身にまとっていることに気づいた。その身なりから判断すると、身分

の高い王族の女性に違いない。そして、この場にいる女性王族としては、モハメッドの妃であるファティマ以外考えられなかった。
「この人たちは、ここで何をしているの？」
さらに不安が膨らんだジェシカは警官に向かって三度尋ねてみた。
「私をどうするつもりなの？」
警官は沈黙したまま、ジェシカを女性たちの前に押し出すと、そのまま、向きを変えて立ち去ってしまう。それから、彼女の耳に医療施設のドアが施錠される音が実際よりもずっと大きく聞こえた。
「私たちのささやかなパーティーにようこそ、ローソンさん」
ファティマがベールを取り去り、憎しみを秘めた瞳を恋敵へ向けながら嘲笑う。
「それとも、恥知らずな売春婦と呼ぶべきでしょうか？」
ジェシカは今にも息が詰まりそうだった。
「どうして、あなたたちは、ここに集まっているの？」
「私たちは――私と従姉妹たちは、あなたに対して“選択”を与えるために、ここにいますのよ、ローソンさん」
ファティマは冷たい微笑みを浮かべながら続ける。
「私たちアラブ人の国では、姦婦は女性の中でも最も忌み嫌われる者とされておりますの。そして、あなたは、その姦婦なのです！」
「わ…、私からモハメッド殿下に近づいたわけじゃないわ！」
ジェシカは必死に言い募った。
「モハメッド殿下の方から誘われたのよ」
「殿下は本当に考えなしで、白人の女性にとっては、じつに御しやすい男性です」
ファティマは再び嘲笑った。
「ですが、今、私たちは、わが夫の愚かさに対処するためにではなく、あなたの密通の罪に対処するために、ここに集っているのです」
他の女性たちも似たようなことを呟きながら、被っていたベールを取り去る。彼女たちを見たジェシカは、不機嫌という感情が実体化したような集団だと思った。そして、アラブ人女性たちから自分

へ向けられている眼差しに、明らかに軽蔑が含まれていることも感じとれた。
「私をどうするつもり？」
ジェシカはおそるおそる尋ねた。
「復讐するつもりなの？」
「ええ、復讐こそアラブの流儀ですの」
ファティマが再び微笑んだ。
「どなたか、この方に話してあげてくださいな」
大柄な年かさの女性が前に進み出ると、憤りを隠せない口調で告げた。
「私どもの王国では、密通は死刑に値します」
「死刑ですって！？」
ジェシカは呆然とした。
「そのとおりです。私たちが、この町のイスラム法廷へ訴え出たなら、あなたは石礫の刑で死罪を宣告されます。そして、その刑が執行されれば、あなたは日没までに死ぬでしょう」
その言葉を受けて、ファティマが楽しげに告げる。
「石礫の刑はイスラムにおける正式な処罰ですのよ」
「私はイギリス人よ。この国の法律は、私に対していかなる効力も持たないわ！」
ジェシカは恐怖に怯えて叫んだ。
「この国の法律は、決して、私に適用されないわ！」
「ローソンさん、残念ながら、今、私たちがいるのは、リヤダから百キロほど離れた砂漠の街です。この文明世界から隔絶された砂漠の中では、イスラム法廷の決定することが唯一の法律でしてよ」
ファティマは、ジェシカが恐怖に怯える姿を心の底から楽しんでいた。
「私を自由にして！　あなたたちに、私を殺すことはできないわ。殿下と私の関係は単なる不倫に過ぎないわ。誰しもがやっていることだわ。そして、不倫したくらいでは、誰も処刑などされないわ！」

そう反論しつつも、ジェシカはよろよろと石壁にもたれかかった。その青ざめている頬を涙が流れ落ちていく。彼女は自分が残虐になぶり殺されるに違いないと確信した。そして、どうして、こんな野蛮で酷い国へ来てしまったのだろうかと、後悔の念が胸をよぎる。
（ああ、神さま！　どうか、私を助けてください！！）
そんなジェシカの姿を見つめて、ファティマは心の中で満面の笑みを浮かべた。
（これで、すべて思いどおりになるわね！）
王族の妻は打ち負かした恋敵へ、さらなる追い打ちをかけるため、ゆっくりと近寄っていく。
「あなたには、死を免れることができる救済策が一つだけありましてよ」
残酷な笑みを浮かべながら、モハメッドの妃は告げる。
「私は、あなたの死など望んでおりません。なぜなら、死の苦しみなど、一時のことに過ぎませんもの」
「どういうこと……？」
ジェシカは弱々しげに尋ねた。
「いったい、何を言いたいの？」
「夫を寝取った姦婦に対して、妻が行う報復が死以外にもあると言っているのです」
ファティマは、ジェシカの目の前まで顔を近づける。
「それは夫の寵愛を受けすぎた白人の愛妾に対して、嫉妬する妻が好んで行う罰でもありますの」
「白人の愛妾に対する罰って……？」
ジェシカは当惑させられた。
「ふふ、それは死刑を除いて、白人女性が受ける最も厳しい処罰ですの」
ファティマは、その瞬間を楽しむように、一旦、言葉を切った。
「その処罰とは、割礼を施すことです！」
「割礼？」

ジェシカは恐怖に喘ぎながら聞き返した。
「……私に？」
女性に対する『割礼』がいかなるものであるか、この国に来ているジェシカは、よく理解していた。
「そうです。それこそが死刑を免れることができる唯一の方法なのです」
ファティマは嘲笑った。
「あなた方西洋人女性は、私どもに多大なる嫌悪感をもたらしています！　アラブの慎み深い女性たちは、決して、あなた方がしているようないかがわしい行いはいたしません！　──セックス、セックス、セックス！　明けても暮れても、それればかりの西洋人！！　それが今、本当に、あなたを深刻な事態に陥れているのです！」
「でも、それで割礼なんて酷すぎるわ。それは女性の体に対する野蛮な切断行為よ！」
ジェシカは抗議して泣き叫んだ。
「あなたたちに、私を罰する権限なんてないわ！　割礼なんか絶対に受けないわよ！！」
「私たちは、べつに、それでもよくてよ。でも、イスラム法廷によって為される決定と大声で罵りながら石礫を投げる群衆、そして、夕暮れの中、無残に横たわる血まみれの屍を思い浮かべてご覧なさい！」
ファティマは物知り顔で告げる。
「石礫の刑は決して楽な死ではなくてよ。私、そのような処刑を実際に見たことがありますの。それは処刑としては、長時間にわたって、このうえもなく辛い、そして、苦しい過程を咎人に与えるものですの。あなたは、そのような無惨な最期を遂げたいと思っていらっしゃるのかしら？」
モハメッドの妻が告げる内容は、ジェシカを心の底から震え上がらせた。しかし、だからといって、女子割礼──女性器切除を受け入れるわけにもいかない。

「……」
「もし、石礫の刑を逃れたいのであれば、あなたは密通の償いとして、自分に割礼を施してほしいと、今、私たちに願わなくてはなりません」
あまりにも残酷な要求に、ジェシカの怒りが爆発する。
「なんて酷いことを言うの！　そんなこと、できるわけないでしょう！　あなたたち、まともじゃないわ！　割礼を受けるなんて絶対に嫌よ！！」
そう叫ぶと、ジェシカは医療施設の出口へ向かって駆けだした。しかし、そこへ辿りつく前に、アラブ人女性たちの手で捕らえられてしまう。
「そのドアには鍵がかけられていますの。あなたは割礼されることを自ら願い出るか、あるいは、イスラム法廷に出向く覚悟をするか、そのどちらかを選択しない限り、ここから出ることが叶わないのです。――ああ、そうそう、一言、お伝えしておかなければ！　この街にあるイスラム法廷の裁判長は、私の又従兄弟ですの。ですから、あなたへの情状酌量はあまり期待なさらない方がよろしくてよ」
従姉妹の言葉に、周囲の女性たちが一斉に賛同の声をあげる。

ファティマの復讐（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

「さあ、どうなさいます？」
ファティマが、ジェシカをしっかりと見つめながら問い詰めてくる。
「小さなナイフか、それとも大きな声で野次る暴徒の群れか、今すぐにお選びになって！　私、あまり気が長くはなくてよ」
ジェシカは蒼い瞳に恐怖の色を浮かべて周囲へ視線を巡らせる——この場にいるアラブ人女性たち全員が自分を凝視していた。その眼差しには、あからさまな敵意と軽蔑が込められていて、ジェシカに対する割礼を熱望していることは明らかだった。その中でも、ファティマの正義を為そうとする意気込みは際立っていた。
ジェシカはアラブ人女性たちに抗う意志が挫けるのを感じた——彼女の意識は自分が十歳か、十一歳だった少女時代へと戻っていた。
その頃、人見知りの激しかったジェシカは、年上の少女たちから陰湿な苛めを受けていたのだ。その乱暴な少女たちは、彼女を徹底的に辱めるために何度か衣服を脱がせたり、さらに泣き喚かせるために裸の尻を引っ叩いたりもした。
この経験は、ジェシカに大きな影響を与えた。
その恥ずかしい苛めを受けている間、ジェシカの秘密の部分は、それによる屈辱で明らかに反応していた。人前で裸になることを無理強いされ、さらに尻を叩かれるという行為に対して、彼女は著しい性的興奮を感じていたのだ。そして、その後も、しばしば、そのようなシチュエーションを夢想しながら自慰に耽ったりするようになっていた……。
ジェシカは自身のそのような性癖を思い返すとともに、ファティマの正義を為そうとする願望を受け入れざるを得ない気持ちになり始めていた。彼女の股間は、あたかも尻を蹴飛ばされる寸前である

かのように疼いていた。
だが、今、ジェシカへ求められている処罰は、とても残酷なものであり、また、永久的なものだった。ただ単に裸にされ、体を叩かれて終わるような一過性ものではないのだ。
「さあ、どうなさるの？」
ファティマが追い立てる。
「あ…、あなた方に不愉快な思いをさせて、申し訳ありませんでした……」
ジェシカは、自分自身が呟く声を遠くに聞いた。
「それで？　さっさとおっしゃって！」
ファティマは、さらに急かす。
「あなた自身への処罰を、自ら乞いなさい！」
(ああ、神さま)
ジェシカは目を閉ざして唇を震わせる。そんな英国人女性の様子を見たファティマは、もうすぐに待ち望んでいた返答が得られると悟り、満面に笑みをたたえる。
「も…、申し訳ありませんでした……。私は本当に……ふしだらな女です……」
ジェシカは絶望的な思いで言葉を紡ぐ。
「わ…、私は、とても……淫らな女です！　どうか、あなた方のように身持ちの良い女性にしてください」
「それはよい心掛けです。ですが、私たちは、もっと具体的にお聞きしたいのです」
ファティマは残酷に要求する。
「私たちが、あなたに対して、何をすれば良いかを、はっきりと口にしてください」
「ど…、どうか、私を身持ちの良い女性にしてください！　私に…… か…、割礼を施してください！　わ…、私は、それに値する罪を犯しました……」
いつの間にか自分自身の口から零れでた言葉に、ジェシカは愕然

とする。
「どうか、淫乱な私から汚らわしい部分を切り取って、貞淑な女性にしてください！」
「たいへんけっこうなことです、ローソンさん。私たちが、今から、それをしてさしあげましょう！」
　ファティマは勝ち誇って微笑んだ。その場にいる何人かのアラブ人女性たちも同意するように頷いて笑顔を浮かべる。
「では、部屋の中へお入りになって」
　項垂れたままのジェシカは、その言葉に従って、十数時間ほど前に屈辱的な触診を受けた診察室の中へ、おそるおそる足を踏み入れていった。
　ジェシカが床に落としていた視線を上げると、部屋の真ん中に置かれている木製の婦人科診察台は、前回とは違い、腰掛け部分を白っぽい布で覆われていた。さらに、その隣へ引き出されているキャスター付き小型テーブルに載せられたトレイ上には、割礼用の鋭利な小型ナイフ、殺菌剤のビン、そして、消毒綿の包みなどが整然と並べられていた。
　ジェシカは自分への割礼が十分に計画されていたことを衝撃を持って理解した。そして、それは、彼女に大きな屈辱感と完全な敗北感をもたらした。
「さあ、着ているものをすべてお脱ぎになって！」
　ファティマが歌うように告げる。
「そして、診察台までいらっしてちょうだい」
　あぶみと革ベルトを備え、白っぽい布を敷かれた婦人科診察台と割礼の道具類のすべてを整えたテーブルを凝視しながら、ジェシカは逡巡する。あまりにもいろいろなものが自分の貴重な肉を蹂躙するために、その場を占有していることに畏怖の念を抱いていた。
　ジェシカは、足を大きく開いて診察台に横たわる自分がアラブ人女性たちによって割礼を施されている光景をイメージしているうちに、なんとも言いがたい奇妙な感覚が再び下腹部から湧き上がって

くるのを自覚した。
このようなことは、ジェシカの少女時代にもよく経験したことだ――いじめっ子たちが、それを彼女にもたらしていたのだ。そして、彼女は、今、それを秘かに喜びをもって感じ、たぶん、性的に興奮していることも理解していた。
（ああ……。どうして、こんなふうに変な気持ちになってしまうのかしら……？）
深まる屈辱感の中で、ジェシカは長衣をゆっくり引き上げて、すっぽりと頭から脱いだ。アラブ人女性たちの目は、ただちに英国人女性の陰部へと引きつけられ、その見映えから、その裸体を焼き尽くさんばかりの嫌悪を込めて見つめた。さらに何人かの年長の女性たちは意地の悪い薄ら笑いを浮かべる。
モハメッドの好みに合わせて、ジェシカは下腹部を覆っていた茂みをとても短く苅り揃えていたのだ。そのおかげで、絶体絶命の危機に瀕している陰核も、この場にいるアラブ人の女性たち全員に、とてもはっきりと見えていた――そう意識した直後、彼女は全身に鳥肌が立って膀胱が縮まるのを感じた。
「では、こちらへいらして」
ファティマは猫なで声で言うと、ジェシカの腕を取って婦人科診察台まで導く。
「さあ、お座りになって」
ジェシカは婦人科診察台の白っぽい布とあぶみを凝視してから、ファティマを見返した。若いアラブ人が笑みを浮かべて頷くのを見た彼女は、体の向きを変えて診察台へ背を向けると、布が敷かれている所に尻を落とした。それから、ゆっくりと背もたれに体を預ける。
すかさず、ファティマが自らの手でもって、ジェシカの両足をそれぞれ持ち上げて、踵をあぶみに置くと、拘束用の革ベルトで手際よく固縛した。それから、あぶみを左右へ大きく動かして、開いたまま閉じられないように固定する。

大きく広げられたジェシカの足の間を見下ろしたファティマは、鮮やかなピンク色に咲きほころぶ性器が自分のものと比較して、とても女性的なたたずまいであることに気づいた。とくに陰門上部に座する肉の膨らみは、非常に卓越したサイズだった。

（西欧人の男たちは、どうして、これほど淫らな“もの„を女に持たせ続けるのかしら？）

ファティマは、ジェシカの大きな“もの„に対して妬みを感じた。彼女自身の小さな“もの„は十一歳のときに切り取られてしまっていたからだ。しかし、もうすぐ、恋敵も自分と同じように彼女自身の“もの„を失うことになるのだ。おそらく、それは白人女性にとって非常に大きな損失に違いないだろう。

（そうよね……。これだけ立派な“もの„ならば、その分だけ、切り取られたときに感じる喪失感も絶大となるはずだわ……）

西欧人女性の大きく発達しきった陰核を見たことによって、ファティマの心に生じていた羨望と憎悪は、自らの手で割礼ナイフを用いて為す復讐の情景を思い描くことで、余すところなく昇華していった。

一方、他の女性たちは、ジェシカの胴周りで革ベルトを固く締めて、さらに両腕も頭より上方へ引き上げてから革ベルトを適用していく。このようにして、英国人女性はアラブ人の女性たちの為すがまま、婦人科診察台の上で完全に拘束されてしまった。

それから、シェービングフォームが用意され、ジェシカの性器全体に満遍なく塗布されると、ファティマが安価な使い捨て剃刀を使って、短い陰毛を恥丘から、そして、大陰唇から丁寧に剃り始めた。

そうやって、ファティマに剃毛されているうちに、ジェシカは少しずつ気持ちが良くなっていき、不本意ながらも性的な高ぶりも感じるようになっていた。そして、しだいに高まる快感から小さな喘ぎを漏らすのを抑えられなくなった。

「ローソンさん、あなたは本当に淫らですのね」

ファティマは手作業を進めながら嘲笑った。

「ほら、ご覧なさいな！　あなたの肉欲の芽、割礼を施すのに都合よく、良い感じに大きくなってきましてよ」
従姉妹の揶揄する言葉に、診察台を囲んでいる女性たちから嫌悪感を顕わにした叫び声があがる。ジェシカの陰核は、今や、完全に勃起しきっていた。ファティマは恋敵に対して、最後の辱めを与えるべく、その膨らんでいる肉の突起をくねくねと転がし始めた。
「せっかくですから、これを切り取ってしまう前に、今一度、最後の楽しみを与えてさしあげましょうか？」
ファティマは上半身を捻って、ジェシカの目を覗きこみながら尋ねた。
「いかがかしら？」
「あなたは……、あなたの手で、それをして……、さらに……、割礼も行うつもりなの？」
ジェシカは陰核に加えられる力が増すのを感じて息を切らせる。
「ああ……、なんてこと！　まさに……、悪魔の所業だわ……！！」
「アラブの昔からの伝統です。夫を寝取られた妻は、その姦婦を好きなようにいたぶることができるのです」
そう言って、ファティマは艶然と微笑むと、指先の動きと力加減を少しずつ強めながら、もうすぐ切り取られる運命にある快楽器官をこねくり回し続ける。
「あっ…、やめて……。あっ…、お願い……。ああーっ……！」
ジェシカは途切れ途切れに喘ぎ声をあげながら、この最後の屈辱から逃れようと、必死に心を張り詰める。しかし、それは無益な抵抗だった——彼女の肉体は自身の意志に従わず、快感の大波を猛烈な勢いで全身を駆け巡らせ、その心の鎧を打ち砕く寸前となっていた。
「よく覚えていらっしゃることね！　今、感じているその快楽こそが、あなたにとっては、人生で最後の性的な快感となるのですから……」
ファティマが揶揄する。

「それと、夫を寝取られた妻が最も残酷な復讐者となることも覚えておかれるとよろしいですね」
「ああーっ！　あーっ！　あああーっ！！」
ついに、ジェシカは爆発的に強烈なオルガズムに襲われる。その目くるめく快楽の波動は全身の感覚を絶妙に翻弄し、神経の隅々にまで行き渡って激しく火花を散らす――同時に、彼女は大きな呻き声をあげて半失神状態へと陥っていった。
ジェシカが意識を朦朧とさせている間に、ファティマは中断していた剃毛作業を再開し、その部分をすっきりとした見映えに仕上げると、濡れタオルで剃り落とされた金毛の混じるシェービングフォームの残滓を綺麗にぬぐいさった。
それから、左手の指で思春期前の少女のように滑らかになった割れ目を大きく広げると、ピンク色の肉襞を捲り返したり、肉芽の付け根まで萼を剥き上げたりしながら、その隅々にまで殺菌剤を塗布して、もうすぐ鋭利な刃先を受け入れることとなる箇所を十分に消毒していく――ファティマは恋敵に感染症などで容易に死んでほしくなかったのだ。
（何十年も、ずっと苦しみ続けていただかなくてはなりませんものね……）
ジェシカの意識が十分に回復するまで、若いアラブ人女性はのんびりと作業を続けた――ファティマは、白人女性が自身に施される割礼をはっきりと目にすることも熱望していた。自分の夫を寝取った女が割礼ナイフの洗礼を受けた瞬間に、どのような表情を浮かべるか、しっかりと記憶に留めておきたいがために……。
付き添いの従姉妹の一人が尿道にカテーテルを挿入し終えた頃、半失神状態から目覚めたジェシカは現状を正確に再認識した。さらに、ファティマが手にした割礼ナイフを目の前にかざしたので、その端正な顔を恐怖に歪めた。
「では、始めましょうか」
ファティマは周りに立ち並ぶアラブ人女性たちに向けて、白人の

姦婦に対する残酷な処罰の開始を冷然と宣言する。
二人の女性が両側から英国人女性の体の上に屈みこみ、各々が大陰唇の右側と左側へ手を添えて、その柔肉を左右に大きく引きくつろげると、ファティマは陰核を包皮ごと鷲掴みにして、上方へ向かって引っぱり上げた。
「いやーっ！」
唐突に為された行いに、ジェシカは甲高い悲鳴をあげてしまったが、実際には痛みと言うほどのものは、まだ何もなかった。
「西欧人の売春婦、覚悟はよろしくて？」
ファティマの喜悦に満ちた言葉に、これから自分にもたらされるであろう激痛を予期して、ジェシカは全身を強ばらせた——そこに冷や汗も加わる。自分に為される処置の激しい苦痛に対する覚悟を少しも持つことができなかったのだ。
「では、参りましてよ！」
そう宣告して、ファティマは手にした割礼ナイフで、まず最初に、左右の小陰唇最上部を陰核包皮と亀頭から素早く切り離した。
「あーっ！」
瞬時に、ジェシカは大きな悲鳴を上げて全身を震わせる——ついに、彼女にとっての地獄の責め苦が今より始まったのだ。ただでさえ、敏感な箇所を麻酔もなしで切られる激痛は、耐えられる限度を遥かに凌駕していた。
ファティマは小陰唇との繋がりを切断したことによって自由度を増し、より上方へと持ち上げられるようになった陰核亀頭の下側へナイフの切っ先を深々と突き刺す——そのとき、カテーテルを下方へ引きながら尿道を傷つけない配慮をすることも忘れなかった。
「あああーっ！！」
これまでの人生で一度として経験したことのない激烈な痛みに対して、ジェシカは蒼い瞳から涙を吹き零しながら婦人科診察台の上で必死に藻掻き、それから、切れ切れに嘆願する声を漏らす。
「ま…、麻酔を……、麻酔薬を……使ってちょうだい！　お願いよ

……！！」

じつは、復讐心に燃える妻は夫を寝取った姦婦に対して、アラブの儀式的な割礼だけで済まそうとは思っていなかった――そう、徹底的な陰核切除術の手順を、この医療施設の医師から指南されていたのだ。

そして、このような陰核切除術は、本来ならば、局部麻酔か全身麻酔を用いるレベルの外科的な手術なのだが、もちろん、ファティマは白人女性に対して、そのような慈悲を与えるつもりは毛頭なかった。

「割礼では、麻酔など使いませんのよ。ご存じないの？」

若いアラブ人女性は意地の悪い笑みを浮かべながら、そう告げると、割礼ナイフの刃先を陰核亀頭の下側から陰核包皮の右側に沿って上方へと進める――その際、ナイフを微妙に傾けて陰核体の下側を切っていくようにした。

「あああああぁーっ！！」

ファティマは、とても慎重だった――陰核脚が左右に張っている辺りで、ナイフの傾きを反対にして、その肉根を安易に切断しないよう十分に留意した。そして、一旦、刃先を引き抜くと、陰核包皮の左側でも同じようにして切り上げていく。

そのまま、陰門上方の細長い隆起が萼状になった末端部で、ナイフの鋭い切っ先を深く切り込むようにして逆U字状に半転させる――その瞬間、そこから、陰核と恥骨を繋ぐ靭帯が断裂する鈍い切断音が生じた。

周囲の組織からほとんど切り離された性的な中枢器官は、今や、性感を伝達する神経や血液を供給する動脈を合わせた血管神経束と鋭敏な快楽神経や緻密な海綿体組織を内包する細長い肉根とで体に繋がっているだけの状態にされてしまっていた。

さらに、それらの性的な快楽を感じられる可能性がある神経のすべてを完全に抉り出すべく、アラブ人の女性がより深い部分へと容赦なくナイフの刃先を刺し込んでいったので、それまで以上の激し

い苦痛が白人女性を苛むことになった。
「うあああぁーっ！！」
繊細な器官の最奥部まで切り刻まれ続けたジェシカは、婦人科診察台にしっかりと拘束されていたにもかかわらず、全身を仰け反らせるようにして藻掻き苦しみ、人間離れした絶叫を放ち続ける。
そして、恥骨下部に沿うようにに張り付いていた二つの肉根が、そこから完全に削ぎ剥がされてしまい、ジェシカの性的な中枢器官を体に留めているものが、左右から陰核体へと繋がる血管神経束のみになったとき、ついに、その瞬間が訪れる――。
「今こそ、私の復讐が叶うとき！」
そう叫びながら、ファティマが舟形をした肉塊を左手できつく握り締めると、大きく広げられた陰門から強引に引き剥がしにかかる――手前に引かれた左手とぱっくりと割れた血まみれの裂け目との間に張り渡された二本の繊維状組織は、その限界まで伸びて、ぴんと張りきっていた。
「いっぎゃーっ！」
ジェシカが部屋中に響きわたるような悲鳴を発し続けていたにもかかわらず、何かが千切れるような不気味な断裂音が診察室内にいる全員の耳に届いた。その直後、陰核器官のすべては姦婦の股間から復讐者の掌の中へと、その居場所を移していた。
「ヴ＄☆グ△※ギ％♯ア￥α――――ッ！！」
乱暴なやり方で陰核神経を引き千切られたジェシカは、喉の奥から断末魔のような叫びを張りあげて、真っ白な意識の中に無数の星を煌めかせながら悶絶してしまう――そう、今、彼女は性的な快感を得られる能力を永遠に失ったのだ。
一方、ファティマは白人女性の股間から奪い取ったばかりの戦利品を意気揚々と掲げ、周囲に集っている従姉妹たちにかざして見せた。その細い指に摘まれた紡錘形の肉塊から垂れ下がっている二本の肉根の末端部からは赤い雫がぽたりぽたりと滴り落ちていた。
「潔白！」

「潔白！！」
周囲の女性たちが一斉に大きな声で叫び立てる。
「潔白！」
「潔白！！」
夫を寝取った姦婦から刈り取った穢らわしい悪の芽を銀色のトレイの中へ投げ捨てると、ファティマは次の処置へと取りかかった。その上端部で真っ赤な傷口を晒している陰門から小陰唇をぐいっと引っぱり出すと、その付け根に沿って割礼ナイフの切っ先を上下に走らせる。
たちまち気を失っていたジェシカが目を見開いて叫び声をあげる。性感神経と表裏一体の陰核を抉り取られたときに比べれば、その痛みは多少ましだったが、それでも肉を断たれる激痛に変わりはない。
「いやーっ！　もう……これ以上切らないで！！」
そんなジェシカの嘆願を黙殺し、ファティマは引き伸ばされて薄桃色となっている肉襞を陰門から着実に切り離していく。右側での作業を終えると、左側でもナイフ仕事を進め、残されていた肉襞も手際よく切り取ってしまう。
ファティマが切り取った二枚の肉襞を再び高く掲げたとき、それを見た女性たちは大きな声をあげて、婦人科診察台の周囲をぐるぐると行進するように巡り始めた。そんな中、歯を食いしばって忍び泣きを漏らしていジェシカを一瞥したファティマは、手にしていた肉襞を陰核と同じトレイの中に放り込んだ。
それから、止血のために傷口を焼灼されたジェシカは、本人にとっては幸運なことに、再び失神し、これ以上の苦しみを味わう必要がなかった。そして、肉の焼けた異臭が漂う中、ファティマの従姉妹の一人が、かつては陰核があったはずの醜く裂けた傷口を丁寧に縫い合わせて綺麗に閉ざしたのだった。

エピローグ

――すっかり目を覚ましてしまったジェシカは、薄闇に包まれた部屋の中で、あの悪夢のような出来事を回想していた。彼女は自身の性的な喜びが永久に失われた日のことを鮮明に思い出し、いつものように涙が溢れてきて枕を濡らした。あのときから、彼女の人生は本来あるべき道筋から誤った方角へと一変してしまったのだ。

ジェシカは割礼の傷が癒えるまでの一週間、あの砂漠の医療施設に留め置かれた。それは惨めな屈辱と苦痛に満ちた日々で、股間から絶え間なく生じる辛く、苦しい痛みは、彼女がイギリスへ強制送還されると警官から告げられた三日目くらいまで延々と続いた。それも、彼女が帰国のために飛行機へ搭乗する頃には歩行するに支障ないくらいまでは治まった。

イギリスへ帰国した後、ジェシカは誰にも何も告げなかった。そして、エールズベリーで借りたアパートの部屋へ引きこもったまま、性的な中枢器官が奪われた部位を狂ったようにまさぐり続けたが、性的な快楽を得ることはできなかった。ときには、ネット通販で秘かに購入した性具を使ってみたりもしたが、膣内で異物を挿入された感触と振動を感じることができただけで、性感そのものを刺激されることはなかった。

そもそも、ジェシカに施された割礼は中東やアフリカの少女たちが受けているFGMとは根本的に違っていた。単に陰核亀頭を切り落とされたのではなく、膣内のGスポットに関連している性感神経の一切合切も抉り取られてしまったのだ。それは儀式的な割礼と言うよりも、性欲異常亢進症の治療手段として、十九世紀にイギリス国内で行われていた外科的な陰核切除術と同じものだった。

半年間、ジェシカは自身の損失との折合いをつけようと、必死になって現状を受け入れる努力に専心しようとした。しかし、性的な

快楽は過去のものとして思い切るには、彼女はまだ若すぎたのだ。その間に、彼女にもたらされた絶望感は極めて大きく、また、精神的にも深く孤立していた。

ほどなくして、とどめの一撃が、ジェシカの心を激しく揺さぶることとなる。アパートに郵便小包が届いたのだ――消印はリャダだった。その小包を開くと、その中には緩衝材によって厳重に梱包されたガラス瓶が納められていた。

美しい意匠を施されたガラス瓶は、透明な液体によって満たされていて、その中に青白い“もの”が三つほど漂っていた――一つは頭がやや膨らんだ二本の尾を持つ芋虫、そして、残り二つは肉厚の細長い葉っぱのようなものだった。

それらがなんであるかわからず、しばらくの間、途方に暮れたジェシカだったが、突然、雷に打たれたかのように全身を震わせた――それらが何であるか、激しい恐怖とともに理解したのだ。

それらの青白い“もの”は、ジェシカが半年も前に砂漠の小さな街に置き去りにしてきた自分自身の“もの”――彼女から無残に切り取られてしまった陰核器官のすべてと小陰唇をアルコールに浸して保存したものだった。しかし、より最悪なものが小包に同封されていた手紙だった。

それを読んでみると――。

『親愛なるジェシカ・ローソンさま

あなたがご自分に対する割礼に同意なされたあの日、あの薄汚れたい小さな砂漠の街において、いかなるイスラム法廷も存在しなかったことをお教えしたいと思い、筆を取ることにいたしました。

むろん、あの街にイスラム法廷があったとしても、あなたご自身が述べられたように、英国人であるあなたに石礫の刑など与えることは叶わなかったでしょう。

今、この事実をあなたにお伝えすることに対して、私は無上の喜びを感じております。もっとも、あのとき、あなたは割礼されるこ

とを喜んで受け入れられていたように、お見受けいたしましたが、違いますでしょうか？
どちらにいたしましても、あなたが姦婦として割礼を施されるに値していたと、今でも確信しております。そして、私は、自らの手で、あなたに割礼を施したことで、とても多くの満足を得ることができました。
また、愚かな夫、モハメッドも、今回、あなたとの密通の件で、大いに懲らしめられました。しばらくの間は、白人女性に近づくことはしないでしょう。
それと、あなたご自身の“記念品”は、やはり、あなたの傍に置くべきであると考え、あなたの元へお送りすることにいたしました。どうぞ、お受け取りになって、あなたの“想い出”を十分に楽しんでくださいませ。
このように時間をかけて完遂する復讐というのも、なかなか洒落たものだとはお思いになりませんか？

かしこ　ファティマ・アリ』

——それを読み終えたとき、激しい怒りにかられて手紙を破り捨てたジェシカは、悔し涙をぼろぼろと零して号泣した。彼女のアラビアでの滞在における最も個人的な“記念品”を、ファティマは嘲りの手紙とともに送って寄越したのだ。
ジェシカは自分自身の“もの”が納められているガラス瓶を見つめながら、あのとき、割礼を受け入れることを選択してしまった己を激しく呪った。そして、今の境遇を必死に受け入れようとしていた心が折れるのを感じた。
そう、ここに、ファティマの復讐は完全に成就したのだ……。